

ジョン・ハーシーの「ヒロシマ」 形成過程の考察―編集者の役割を中心に―

繁沢 敦子

1 はじめに

米国のジャーナリストで後に作家となったジョン・ハーシー (John Hersey) の「ヒロシマ」^①は、一九四六年八月三十一日号の『ニュー Yorker』 (New Yorker) 誌を独占する形で掲載されると、同年一月にはノック社から単行本の形で出版された。以来、複数の出版社から版を重ね、読み継がれている^②。翻訳された言語の数は分かっているだけでも十六に上る^③。一九八五年に広島を再訪して書いた続編を加える前のいくつかの版には次のような謝辞が冒頭に付されている。

「ヒロシマ」は『ニュー Yorker』誌に最初に掲載された。著者は掲載にあたって多大な役割を果たしてくれた同誌の編集者たち、特にハロルド・ロス (Harold Ross) とウィリアム・シローン (William Shawn) の両氏に感謝の意を表したい^④。

ハーシーのほかの作品で、編集者のみに対してこのような謝辞が捧げられている例を筆者は知らない^⑤。どうしてこのような謝辞が付されたことになったのだろうか。編集者が著者の作品を編集し、よりよい作品にする手助けをすることは日常茶飯事のほうである。ハーシーがあえて記した謝辞は、「ヒロシマ」の誕生において、二人の編集者が特筆に値する貢献を行った証ではないだろうか。そうであるなら、一体どのようなものだったのか。

ハーシーは「作品がすべてを語っている」として、作品については自ら語らない主義だったため^⑥、この件についても生前、詳細に明らかにすることはなかった^⑦。文学を一つの芸術と捉える場合、完成品こそすべてであって、その成り立ちを議論することに何の意味があるのかという考えもあろう。とはいえ、「ヒロシマ」という作品の重みや影響を考慮すれば、その形成過程やそこにおける編集者の役割を検証することも一つの研究に値するよう^⑧に思われる。第二次世界大戦中の米国では、原爆開発の秘密は各報道機関に協力を求める自主検閲の形で守られていた^⑨。戦後も原爆をめぐる言説空間は、米政府の秘密保持政策によって操作されてきた歴史がある^⑩。なによりも、原爆という兵器には、放射線の影響など特殊かつ未知な側面がある。

筆者はすでに「ヒロシマ」が米国で常々語られてきたように「原爆の影響を余さず描いている」のかを検証する論稿を発表しているが^⑪、雑誌の場合においては作家だけでなく、編集者の影響も検討されなければならないと感じてきた。特に『ニュー Yorker』誌の創刊者であるロスは、想像できるほどに記述内容を自分が理

解できるまで作者に事実を確認する編集姿勢で知られていた。

本稿ではまず、ハーシーが『ニューヨーカー』誌に被爆地のルポを書くに至った経緯を振り返る。そしてハーシーが母校であるイェール大学に寄贈した「ヒロシマ」の自筆初稿⁽¹¹⁾とニューヨーク公共図書館が所蔵する「ヒロシマ」原稿に対するロスの質問表、そして実際に『ニューヨーカー』誌に掲載された記事を照らし合わせ、どのような修正や加筆が行われたのかを分析する。ロスの質問表は、全体分は揃っていないため、検証手段としては限界があるが、現存するものを通して編集者がハーシーに求めた内容や、編集者の意見が反映された内容と程度の傾向を明らかにすることを試みる。

先行研究

「ヒロシマ」の形成過程における編集者の関わりについての研究としては、『ニューヨーカー』誌のコピーエディターとして「ヒロシマ」の校正を担当したという編集者のエドワード・チェイス (Edward T. Chase) が、自らが所有する当時の編集史料を元に論稿を書いている⁽¹²⁾。また、ジャーナリストでデラウェア大学教員のベン・ヤゴダ (Ben Yagoda) が『ニューヨーカー』誌の歴史を描いた著書の中で取り上げている⁽¹³⁾。二人はいずれも、ハーシーの自筆初稿との対比は行っておらず、ロスの質問表と出版された「ヒロシマ」の記述を照らし合わせることで、ロスの指摘が反映されているかどうかを判断している。ロスの編集スタイルについては『ニューヨーカー』誌でも活躍した漫画家作家のジェームズ・

サーバー (James Thurber) がロスの半生を綴った著書の中で描いている⁽¹⁴⁾。シヨーンについては『ニューヨーカー』誌の専属ライターだったヴェド・メータ (Ved Mehta) の著書が詳しい⁽¹⁵⁾。

「ヒロシマ」関連史料について

本論に入る前に、史料について説明しておきたい。ハーシー文書についてはイェール大学のバイネキー図書館が、一九四四年から一九九二年にかけてハーシーから寄贈を受けた、あるいは購入した、全七十二箱分を所蔵している⁽¹⁶⁾。本稿で使用している「ヒロシマ」初稿は、一九四七年春に寄贈されたものである⁽¹⁷⁾。藁半紙様の用紙百三十枚に鉛筆書きされたもので、上書きの形で多数の加筆・修正も行われている。後で触れるが、これらの加筆・修正は、ロスの質問や指摘を反映しているものも多く、初稿として『ニューヨーカー』誌に提出された後に加えられたものであると考えられる。

「ヒロシマ」をはじめ、『ニューヨーカー』誌に元々掲載されたハーシーの作品に関する史料は、ニューヨーク公共図書館が所蔵する『ニューヨーカー』文書にも含まれている。同文書は一九九一年に同誌から寄贈された、二五〇九箱に上る膨大な史料である⁽¹⁸⁾。「ヒロシマ」関連としては複数の箱が存在し、編集者ほか、同誌関係者との通信文や転載を求める各報道機関からの書簡、読者からの手紙をはじめとする出版後の反響に関する記録が含まれている。ロスの質問表も同館が所蔵するが、今のところ、一、二の二章分しか確認されていない。質問表に対応する印のついたゲラも未確認である。

~~ADVENTURES~~ ~~INCIDENTS~~ ~~HIROSHIMA~~

The "ORIGINAL CHIEF" BOARDS

A NOISELESS
I: ~~THE~~ FLASH.

~~At fourteen minutes~~ ^{at quarter} past eight in the morning ^{on} August ~~11th~~ ^{6th}, 1945, Japanese time, at the moment when the first atomic bomb flashed above Hiroshima, Miss Toshiko Sasaki, a ~~secretary~~ ^{clerk} in the personnel department of the East Asia Tin works, had just sat down at her ~~desk~~ ^{place} in the plant office and was turning her head to speak to the girl at the next desk; Dr. Masakazu Fujii ^{settled down} ~~was reading~~ ^{over his} ~~the~~ Osaka Asahi on the porch of his private hospital overlooking one of the seven deltaic rivers which divide Hiroshima; Mrs. Hatsuyo Nakamura, ^{a tailor's widow, stood in her kitchen by the window} ~~the widow of a tailor killed at Singapore~~, watching a neighbor peevishly tearing down his house, for it lay in the path of an ordained fire lane; Father Wilhelm Klemsorge, a German priest of the Society of Jesus, ^{reclined} ~~was~~ ⁱⁿ his underswear ~~on~~ ^{on} a cot on the top floor of the mission ^{house} ~~in~~ the city, reading a Jesuit magazine, Stimmen der Zeit; Dr. Terufumi Sasaki, ^{a young member} ~~of~~ ^{large} the surgical staff of the fine, modern Red

Hiroshima, first draft, autograph manuscript, Box 2, YCAL MSS 707, John Hersey Papers. Yale Collection of American Literature, Beinecke Rare Book and Manuscript Library.

チェイスは自ら所蔵するというロスの質問表に多くを依拠しているが、いずれも三、四の章についてではないように見受けられる。チェイスは二〇〇五年に亡くなり、その文書類は二〇一〇年までに遺族から母校であるプリンストン大学図書館に寄贈されたが⁽⁹⁾、同大図書館によるとロスの質問表は含まれていない⁽³⁰⁾。

2 ハーシーと二人の編集者

本章では、「ヒロシマ」が生まれた背景を、ハーシーとロス、シヨーンの経歴や『ニュー Yorker』誌の当時のあり方から見ていく。

ハーシーは一九一四年六月、プロテストアントの宣教師夫婦の子どもとして中国・天津で生まれた。父親の病気のため十歳の時に家族で米国に戻り、コネチカット州レイクビルの名門私立ホッチキス高校を卒業後、イェール大学に入学し、一般教養の学士を取得。その後、英ケンブリッジ大学で英文学を学び、帰国した一九三七年の夏をノーベル賞受賞作家のシンクレア・ルイス (Sinclair Lewis) の秘書として過ごした。その年九月には、かねてから希望していた『タイム』誌の編集者として採用され、同誌の発行人で編集者のヘンリー・ルース (Henry Luce) の下で働いた⁽³¹⁾。北京ではその七月、盧溝橋事件が勃発していた。ルースも宣教師 (長老派) の子どもとして中国で生まれ育ち、ホッチキス高校とイェール大学を卒業している。経歴が似ていたこともあるだろう、二人は間もなく親子のように親しくなり、ルースはハーシーを自分の後継者と目するようになったと言われる⁽³²⁾。

第二次世界大戦中、ハーシーは『タイム』誌と同誌系列の『ライフ』誌の特派員として欧州やアジア各地を転々とし、両誌に原稿を書く傍ら、著作の出版も始めていた。一九四二年には初めての著書『Men on Batavia』⁽³³⁾を、翌年には『Into the Valley』⁽³⁴⁾を上梓し、一九四四年に出版した『アダノの鐘』⁽³⁵⁾でピューリッツァー賞を受賞した。『アダノの鐘』は、イタリア・シチリア島を占領した連合軍の米軍少佐が、進駐した町で戦時中に軍部に押収された町のシンボルの鐘の復元に尽力するという話である。実話に基づいた人間愛みなぎるフィクション作品で、その一二月にはブロードウェイでミュージカルとして上演されるなど、大きな評判を呼んだ⁽³⁶⁾。

『タイム』誌の後継者とも目されていたハーシーが、どうして『ニュー Yorker』誌に「ヒロシマ」を書いたのだろうか。ここで『ニュー Yorker』という雑誌についてみていきたい。

『ニュー Yorker』誌は一九二五年二月、当時三二才だったロスによって創刊された。ロスはコロラド州アスペン生まれ。スコットランド・アイルランド系移民の父と東部出身で元教師の母を持ち、幼少から文学に親しんだ。ユタ州ソルトレーク市の高校入学後は学校新聞の記者や地元紙の見習い記者として働き始め、一六歳で高校を中退すると、カリフォルニアやルイジアナなど各地の新聞社を転々とした。米国が第一次世界大戦に参戦すると兵役に志願し、合衆国海外遠征軍の第一陣としてフランスに渡った。当初はボルドーにあつた第十八工兵鉄道連隊の一員として建設作業などに従事していたが、同遠征軍の機関紙として『スターズ・アンド・ストライプス』 (Stars & Stripes) 誌が刊行されると、編集部

員に志願して迎え入れられた。⁽²⁷⁾

パリの編集部にはロスのほか、『ニューヨーク・タイムズ』紙の劇評論家アレクサンダー・ウールコット (Alexander Woolcott) や『ニューヨーク・トリビューン』紙の人気コラムニストであるフランクリン・アダマス (Franklin P. Adams) がおり、即戦力として活躍した。兵士の需要に即した情報や読者からの投稿のほか、本土在任の特派員による最新ニュースをふんだんに掲載し、コミックやイラストを効果的に使ったレイアウトも好評を博した。部数はこの間、三万部弱から五万六千部に増加し、スタッフも当初の数百人から三百人以上を数えるようになった。⁽²⁸⁾

ロスはドイツとの休戦協定が成立した直後の一九一八年一月、同誌の編集長に就任していたが、翌年四月に除隊となり、同年六月に帰国すると、ニューヨークで在欧中に引き受けていた退役軍人向けの週刊誌の編集の仕事に就いた。そこで戦時中にウールコットらと温めていた週刊誌創刊の機会を伺っていたところ、社交の集まりで知り合った資産家ラウル・フライシユマン (Raoul Fleischmann) から資金援助を受けることになり、妻でジャーナリストのジェーン・グラント (Jane Grant) とともに『ニューヨーク』誌を創刊した。⁽²⁹⁾

『スターズ・アンド・ストライプス』誌でのロスの経験は、見事に新雑誌で発揮された。フィクションとノンフィクションの読み物のほか、コミックやゴシップを取り入れ、軽さと洗練された都会的センス溢れる雑誌は、ニューヨークの心を掴んだのである。作家らのあこがれの媒体となり、掲載を求めて多数の投稿が寄せられるようになった。当初は赤字続きだった経営も、一九二

八年末には初めて黒字となり、部数も七万部を超えた。一九二九年一〇月には全国版を発売し、購読地域を拡大したこともあり、同時期に始まった大恐慌にもほとんど影響を受けなかった。⁽³⁰⁾

ロスは痼癪持ちで、腹を立てて人を口汚くのものにしても少なくなかった。そのために『ニューヨーク』誌を離れていく部下もいた。しかし、編集者としてのロスの能力に疑いを持つものはいなかった。ロスは、雑誌に掲載されるすべての記事を丹念に読み込み、筆者や担当編集者にいくつもの質問をぶつけた。事実関係には慎重で、ロスが納得しないものは、紙面には掲載されなかった。⁽³¹⁾ そうした編集スタイルをうるさがるライターもいたが、「ほとんどが、ほかのいかなる編集者よりも、ロスに批判してもらうことを望んだ」⁽³²⁾

気分屋で言動が一致しないことも多いロスであったが、その複雑かつ矛盾を抱えた人格は、幅広い話題を扱う『ニューヨーク』の誌面を体現していたのかもしれない。読者に笑いと明るい気分を与えるユーモアを第一とし、「重要な話はほかの雑誌に任せよう」と言いながら、人種差別など深刻な問題を扱う社会派の記事も率先して載せた。⁽³³⁾

とは言っても、ジョークや軽い話題を売り物にしていた『ニューヨーク』誌が、社会派のルポにも力を入れたのは、一九三九年にノンフィクション部門の編集長となっていたシヨーンの影響が大きい。シヨーンは一九〇七年、シカゴの裕福な刃物業の家庭に生まれた。ミシガン大学を中退し、ニューメキシコで新聞記者やフランスでジャズ・ピアノリストなどの仕事に就いた後、同様にライターで『ニューヨーク』誌に採用されていた妻の口利きで

一九三二年、同誌に編集者として仮採用された。すぐに能力が認められ、翌年には正規スタッフに、一九三六年にはノンフィクション部門の副編集長になっていた⁽³⁴⁾。ロスが一九五一年一月に亡くなると、一九八七年二月まで四半世紀にわたって『ニューヨーカー』の総編集長を務めた⁽³⁵⁾。シヨーンの代では環境や貧困、人種問題、戦争、核軍縮といった社会問題を取り上げるようになったが、シヨーン自身は、それは「書き手や読み手の新たな意識」を反映しただけ、と考えていた⁽³⁶⁾。長文の客観的な調査報道を好み、二十世紀で最も影響のあった米国のジャーナリズム作品のランキングで、「ヒロシマ」に次いで二位に選ばれたレイチエル・カーソンの「沈黙の春」⁽³⁷⁾のほか、トルーマン・カポティの「冷血」⁽³⁸⁾、ハンナ・アーレントの「イエルサレムのアイヒマン」⁽³⁹⁾を世に出すことになるのも、『ニューヨーカー』誌であり、シヨーンだった。

ハーシーが『ニューヨーカー』誌に初めて寄稿したのは、後に米大統領となるジョン・ケネディ (John F. Kennedy) 海軍中尉が、ソロモン諸島付近で乗船していた哨戒魚雷艇がもう一隻と衝突して投げ出され、負傷した部下とともに一週間行方不明となった際の起死回生の物語である。一九四四年六月に掲載され、『リーダーズダイジェスト』(Reader's Digest) にも転載された⁽⁴⁰⁾。

ハーシーと『ニューヨーカー』誌の接点は何だったのか。ロスによると、シヨーンがハーシーの才能に惚れ込み、その二年ほど前から寄稿を求めてアプローチしていたという⁽⁴¹⁾。当時ハーシーは『ライフ』誌に署名入りで長文の記事を書くようになっていた。しかし、ハーシーを誘惑することがどのような結果をもたらすか、

ロスが理解していないわけがない。『ニューヨーカー』誌のわずか二年前に創刊された『タイム』誌のルースとロスとは、同じビルにオフィスがあった創刊時から、お互いに強いライバル意識を持っていた。特にロスの腹心だったラルフ・インゲソール (Ralph M. Ingersoll) が一九二九年、タイム誌の系列誌『フォーチュン』(Fortune) 誌に引き抜かれてから、それは激化していた⁽⁴²⁾。

とはいえ、ハーシーも、『タイム』誌に終世、忠誠を誓うつもりはなかったようである。ワンマンな編集者だったルースは、熱烈な共和黨員でもあり、政治的目標のためならニューズの歪曲も厭わなかった。同じワンマンでも、事実上忠実で、原稿を政治的に利用することのないロスの雑誌が、ハーシーにとつて魅力的に思えたとしても不思議ではない。ハーシーは特派員だった一九四四年、ルースからニューヨーク本社での編集主任への昇進の誘いを受けたが、自分はライターであり続けたいこと、そして「民主黨員である自分が編集者になることは、自分にとつても、タイム誌にとつても、得策ではない」ことを理由に断つている⁽⁴³⁾。ちなみに、ルースとの関係は、ハーシーが「ヒロシマ」を『ニューヨーカー』誌に書いたことにルースが腹を立て、ほぼ決裂することになる⁽⁴⁴⁾。

終戦後、ハーシーは『タイム/ライフ』と『ニューヨーカー』の両誌に寄稿する契約を結び、極東に向けて出発した。中国での仕事を終えて一九四六年五月二二日、上海から空路、東京に向かった。広島には陸路二五日に到着し、約二週間滞在した後、少なくとも六月七日に東京には戻り、九日には東大の都築正男、嵯峨根遼吉、理化学研究所の仁科芳雄らに取材した後、米国には一二

日に帰国した。⁽⁴⁵⁾

3 ハーシーの初稿とハロルド・ロスの質問表

ハーシーは帰国して約二週間後の六月二八日、シヨーン宛てに手紙を出し、原稿が四部構成になること、また二、三週間以内に完成できる見込みであることを伝えている⁽⁴⁶⁾。ハーシーが日本到着前に中国で偶然読んだソントン・ワイルダー(Thomson Wilder)の『サン・ルイス・レイ橋』(The Bridge of San Luis Rey)を「ヒロシマ」を書く上で参考にしたことは良く知られている。ペルーの吊り橋の落下事故で亡くなった五人の男女が、同時刻に橋を渡るに至るまでの足跡を追った物語。ハーシーはそこから、広島で同様に複数の人々について原爆投下の瞬間までの彼らの暮らしや相互の交錯を描くことを着想したという。執筆にあたっては、フィクションの手法を取り入れ、六人の主人公のそれぞれの視点で物語を綴ることで、ジャーナリズム作品に付き物の書き手の存在感を無くし、読者がそれぞれの登場人物を通して語られることを追体験することを狙った⁽⁴⁷⁾。

ハーシーが初稿を完成させたのは七月下旬である⁽⁴⁸⁾。ロスの質問表に付された最も早い日付は八月六日であるが、ここですでにゲラの番号が登場している。『ニュー Yorker』誌では掲載が決まった原稿はすぐにゲラの形で出力され、ロスとシヨーンは『ニュー Yorker』誌に掲載されるすべてのゲラに目を通した。ロスは疑問点を余白に書き込むことを常としており、特に気になる点については別紙に箇条書きした⁽⁴⁹⁾。一つの記事に通常六〇から七〇の質

問が並ぶことが普通だった。それを作者に見せる際には、それは純然たる質問で、強制ではないとも強調することも忘れなかった。筆者によつては、そのほとんどを無視する者もいたが、そのわずかな変更や修正が大きな違いをもたらすことも多かった⁽⁵⁰⁾。

サーバーによると、ロスにかかると原稿は腕のいい機械工が直す車だった。その機械工は、資格や学位を持つていたわけではないが、わずかなエンジン音の違いで問題を見抜く勘の持ち主であるのだ。あるライターは「一本の自分の原稿にロスは三〇の質問を付けてきた。(中略)そのうち二十八を無視することにしたが、残りの二つが原稿をつまらないものからいいものに変えてしまった」と言う⁽⁵¹⁾。

シヨーンの場合は、質問表を作ることはなく、やり取りは作者と直接行われたため、その編集の足跡は見る事ができない。しかし、ロスの質問表にはシヨーンの意見に言及するものもあり、共同作業の側面があったことが伺われる。『ニュー Yorker』誌では、作者の許可無く変更を加えることはなく、編集の手が元々の作風を変えてしまうこともなかった。とは言え、シヨーンの手にかかれば、加えられるカンマ一つが違いをもたらした⁽⁵²⁾。

初稿が完成すると、ハーシーとロス、シヨーンはマンハッタン西四三番通りのビル十九階にあるロスのオフィスに閉じこもり、その後毎日十時間、二十日間にわたって「ヒロシマ」の編集にあたった。この時の編集作業を振り返って、ハーシーは次のように語っている。「あれほど慎重に編集されるのは初めての経験だった。『ライフ』誌では(中略)私の原稿を一人の編集者として最後まで読んでいないこともあったのだから。」⁽⁵³⁾ ロスは「明確さと

正確さを要求した。⁽⁵⁴⁾「チエイスは、事実に対するロスの厳密さ、そして感性こそが、『ニューヨーカー』誌をほかの雑誌と差別化しえた要素だ」という。⁽⁵⁵⁾

「ヒロシマ」に対するロスの質問表は、章ごとに箇条書きされ、第一章についての八月六日付けの質問表には四十七の質問項目が付いている。⁽⁵⁶⁾八月二十六日付けの質問表には三十一、⁽⁵⁷⁾八月二十九日付けの質問表には十六の質問項目がある。⁽⁵⁸⁾第二章については八月八日付けの質問表で五十七、⁽⁵⁹⁾八月十九日付けの質問表で六十八の質問項目が付されている。⁽⁶⁰⁾二つの章だけで、合わせて二百二〇に上る。とは言え、経年の劣化から判読できないもの、質問に対応するように印の付けられた「ゲラ」が見つかっていないことから、原稿のどの部分を指すのが分からない、あるいは、そのために質問の意味すること自体も不明なものがこのうち約九〇件あった。それ以外に、恐らく作者の好みやこだわりなどの理由で原稿に反映されなかった質問や指摘が約二〇件あった。本稿ではよって残り約百一〇件について検討した。

ハーシーの手書き初稿については、本来の意味での初稿と言えるかについては疑念が残る。「はじめに」で述べたように、加筆・修正がいつ加えられたものか分からないからであるからである。余白への加筆や元文を修正線で消した上に書き直しという形でロスの質問や指摘のほとんどが反映されていることから、筆者はこれらが初稿として提出された後の編集作業の段階で加えられたものと判断しているが、そのことはしかし、これら変更の全てが編集段階で行われた可能性を意味するものではない。

ハーシーがイェール大図書館に初稿を寄贈したことを知った口

スは、シヨーンが相当手を入れてはるはずだと知人に漏らしているが、問題の初稿にはハーシー以外の筆跡は見受けられない。⁽⁶¹⁾つまり、『ニューヨーカー』誌に提出された初稿とは別に、寄贈を念頭に、ハーシーが当初から作成していた予備、あるいは新たに復元したものである可能性もある。いずれにしても本稿では、ハーシーが寄贈した手書き草稿を「初稿」と捉え、ロスの質問が反映された形で加えられた加筆や修正を分析の対象とした。以下に何が、どのように反映されたかを見ていきたい。

4 「ヒロシマ」の編集⁽⁶²⁾

質問表の内容を見ていくと、ロスが重きを置いていたのが、読者にとって理解しやすいこと、そして事実の正確さだったことが分かる。「Picture」（イメージする）という言葉もしばしば登場するが、ロスにとっては原稿を読んで情景が思い浮かぶことが分かりやすさの判断基準だったと言える。そのためロスが執筆に多くの質問を投げかけた。例えば、クラインゾルゲ神父が原爆投下の瞬間に雑誌を読んでいた自室について、初稿で「宣教師館の最上階」なっていることについて、「最上階というのは建物が何階建てか分からないという意味がない」と指摘し、ハーシーは「三階建ての宣教師館の三階⁽⁶³⁾」に修正している。谷本氏が荷物を運んだ己斐の家の造りについても、ハーシーは初稿で「木造で玄関の間は、寝具類や衣類がいっぱい」とだけ描いていたが、ロスが「日本の建物は一般的にどういふ素材でできているのか⁽⁶⁴⁾」と尋ねたことに応えるように「家の造りは、日本のこの地方のたい

Mr. Wigglesworth:

Watch for Hersey's 8/16/46

Miss F. H. H.
August 3, 1946

Mr. Ross's notes on "Reporter - Some Events At Hiroshima - Part II" by Hersey.

A very fine piece beyond any question; got practically everything. This will be the definitive piece on the classic piece on what follows a bomb dropping for a long time to come. I read it very carefully, and have a lot of notes. I probably read it over-zealously, and more than the normal number of queries are to be discounted probably.

I am still dissatisfied with the series title.

There is, I think, one grave lack in this piece. It may be Hersey's intention that there be. If so, ask consideration for what I may say now. All the way through I wondered about what killed these people, the burns, falling debris, the concussion—what? For a year I've been wondering about this and I eagerly hoped this piece would tell me. It doesn't. Nearly a hundred thousand dead people are around but Hersey doesn't tell how they died. Would it be possible—if so, would be wise—to tell on Gally 7 where he gives the 100,000 people how many were killed by being hit by hard objects, how many by burns, how many by concussion, or shock, or whatever it was. Or would this be getting ahead of his story. I haven't read third and fourth parts yet. At one place, way over on Gally 14, a woman with no visible injury dies. Here a lot of the corpses that day without visible burns or injury. How about all the dead that littered the pavement when the Catholics were migrating—that proportion of them unmarked. I think getting a little into the piece, fairly early, would be a good idea—unless, as I said, it conflicts with Hersey's basic plan.

One thing, though, I think he ought to mention the waiting, though. He doesn't mention it at all until Gally 11, where it comes as a considerable surprise to the reader that, more or less generally, the killing was waiting. That probably late in piece to be telling that; several scenes have been described in which there must have been general waiting. (One thing more: I think that from time to time Hersey might tuck up on the time of day; reader loses all track of the hours.)

I would suggest (I'm asking this as in insert in these notes after completing annotation) that Hersey might do well to tuck up on the time—give the hour and minute, exactly or roughly, from time to time. The reader loses all sense of the passing of time in the episodes and never knows what time of day it is, whether 10 a.m. or 4 p.m. I thought of this half way through annotation and mentioned it several times. If I appear to be nagging on the subject, that's why.)

1. I'd tuck up on the time and the date by all means, repeating wording of first part.
2. The safe place mention here isn't explained, and maybe there's a question as to whether the place was safe, or just a fluke. Anyhow, it wasn't that he was out in this suburb that made the place safe, but the fact, as stated in Part I, that he was between two rocks, crossed again. It was that niche that made him safe, and should be repeated here, I think. The soldiers were practically in same place, but they weren't safe.
3. I raised the question at end of Part I as to whether there were a lot of people in the house. If there were a lot of people and repair made Part I, perhaps should be made here too.
4. Trouble with these Jap quotes. Ordinarily our style has been to follow the foreign word with a dash and then the translation in English. That doesn't work here, because the quote partly in Jap and partly English. I'd avoid this construction, and follow our rule that all such words should be translated. That would mean revision here and several other spots.

Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II" by Hersey, dated August 8, 1946, folder 2 (1946), Box 39 (EDITORIAL-Ross, Harold-Notes on Writings), New Yorker Records. Manuscripts and Archives Division. The New York Public Library. Astor, Lenox, and Tilden Foundations.

ていの家と同じで、木の骨組みと板壁とが、重い瓦屋根を支えている⁽⁶⁵⁾」という一文を加筆している。

ロスは原稿からイメージしたことで、自分の知識が噛み合わない時も質問した。谷本氏が浅野泉邸で負傷者を舟で川を渡すのに使った「竹竿」について、ロスは「細い竿ならそう書くべきだろう。しかし、大変細いものだと舟を漕ぐことはできないだろう。(中略)

二〇人乗りの舟であるなら、私なら太い竿と言いたるところだ⁽⁶⁶⁾」と述べる。ハシーは「太い⁽⁶⁷⁾」という一語を加筆している。ロスはまた、火傷で腕の皮膚がむけてぶら下がり、痛さのあまりに幽霊のように両腕を前に差し出して人々が歩く様子を、ハシーが「何か物を運ぶように手を上げている」と描写していたのに対し、「イメージがわからない」とし、「大皿を運ぶような感じなのか。スーツケースやブリーフケース、荷物を下げているような感じなのか」と尋ねている⁽⁶⁸⁾。ハシーはその部分を最終的に「両手で物を抱えるように両腕をさしあげたきりの⁽⁶⁹⁾」に書き直している。

ロスは、初めて登場する地名については、中心部からの距離やどういった場所かの説明を求めた⁽⁷⁰⁾。ハシーは、己斐については「市の中心を去ること約三・二キロの⁽⁷¹⁾」、祇園については「郊外地⁽⁷²⁾」、長束の修道院については「市外四・八キロの山ふところにある⁽⁷³⁾」という加筆を行っている。B29機が集結地点としていた琵琶湖の位置については、初稿では「広島上方の本州中央」としていたが、「上方」では曖昧だ⁽⁷⁴⁾という指摘を受け、「広島の本東⁽⁷⁵⁾」に変えた。ロスはまた、シヨンとの合意事項として、爆心からの距離を明記することを提案している⁽⁷⁶⁾。実際、六人の主人公が原爆投下の瞬間にいた場所について、次のように爆心か

らの距離が加筆されている。

なぜなら、ここは爆心地から三五〇〇ヤード、すなわち約三・二キロ離れていたからである⁽⁷⁷⁾。(谷本氏がいた己斐の人絹屋の自宅。谷本氏が閃光を受けて身を伏せる時間的余裕があったことを説明して)／この家は爆心から一三五〇ヤード、すなわち約一・二キロのところにある⁽⁷⁸⁾。(中村初代さんの自宅)／場所は中心から約一・四キロ離れていた⁽⁷⁹⁾。(藤井博士の病院)／中心から約一・三キロ離れていたからである⁽⁸⁰⁾。(クラインゾルゲの所属する教会。直撃弾を受けたと考える余裕があったことを説明して)／病院は爆心から約一・五キロある⁽⁸¹⁾。(佐々木医師の勤務する赤十字病院)／工場は爆心から約一・五キロのところにある⁽⁸²⁾。(佐々木とし子さんの勤務する工場)

これによって、爆心からの距離に応じた被爆の実相と被爆時の状況を『ニュー Yorker』誌の読者である米市民は知ることができた。ロスはまた、登場人物の行動についてしばしば説明を求めている。例えば、「どうして皆浅野泉邸に集まったのか⁽⁸³⁾」と尋ねたのに対し、ハシーは「この隣組の避難地帯に指定されていた⁽⁸⁴⁾」という一文を加筆している。佐々木とし子さんが働く工場で迫害供養を行う予定だった自死男性については、初稿では「いまではえらい海軍軍人になった土地出身の人」となっていたが、ロスが「どうして製缶工場で供養を行うのか⁽⁸⁵⁾」と尋ね、ハシーは「元職員で⁽⁸⁶⁾」という一言を加えている。ハシーは、谷本氏が負傷者を船に乗せて浅野泉邸から川を渡そうとしたことについてもロス

から理由を尋ねられ、「延び広がる火事から逃してやろうと思つたのである」⁽⁸⁷⁾という一文を足した。その少し前に谷本氏がシャツと靴を脱いで川を渡つた理由についても問われ、「川のむこう岸には火の手が見えないので」⁽⁸⁸⁾と付け加えた。

登場人物の日本語の名前は米国人には馴染みが薄く、読者の混乱を避けるため、ロスが主人公と直接関係のある人々以外はできるだけ話に登場させない、あるいは名前を入れない方が好ましいとした。例えばロスは、幟町隣り組の前組長の吉田さんを登場させることには当初否定的だった。「ほかの登場人物と接点を持たせるべき」⁽⁹⁰⁾との意見を受け入れハーシーは、中村さんやクラインゾルゲ神父が吉田さんの助けを求める声に気づかないまま通り過ぎるくたりを加筆している⁽⁹¹⁾。赤十字病院の外科医長の名前をハーシーは当初出していたが、「また日本人の名前が増えてしまふ」⁽⁹²⁾というロスの懸念を受けて削除している。ロスはまた、日本名では見分けのつかない男女を区別するために、男性は「ミスター」、女性は「ミス」あるいは「ミセス」を姓に付ける形で統一することを勧めている⁽⁹³⁾。

記述に正確を期することに執念を燃やすロスの姿勢は、「ヒロシマ」の編集において最大限に生かされたと言つてよい。一冊の本になるほどの長編を一ヶ月で完成させることは、初めてではなかったにしても⁽⁹⁴⁾、原爆被害という未曾有の事態の全体像を把握し、それを自分の中で消化して、新たに言葉を紡ぐ作業は、ハーシーにとつても簡単なことではなかったはずだ。時には事実関係で整合性の合わない記述もあった。例えば、藤井医師の病院の看護師の数が初稿第一章では、四人となつていたが、第二章では六

人いた計算（二人生存、四人死亡と述べていることから）になつていたが、ロスの指摘⁽⁹⁵⁾を受けた形でハーシーはそれを六人に統一している⁽⁹⁶⁾。

広島市全体の死者数についても、ハーシーは初稿では「一〇万人近くが即死し、同数が負傷した」としていたが、「一〇万人という数は、即死だけではなく、その後亡くなった人も含めた数字では」⁽⁹⁷⁾とするロスの指摘を受けて、「ただの一撃で（中略）即死もしくは致命傷一〇万人、負傷者一〇万人以上にのぼつた」⁽⁹⁸⁾に書き改めた。クラインゾルゲ神父の同僚であるシッフア神父の怪我が、初稿では「左耳の上の動脈を切断し」となつていたのに対し、ロスは「本当にそうなのか。動脈が切れたら、止血しない限り、短時間で人は死んでしまうものだ」⁽⁹⁹⁾と主張し、ハーシーは「左耳の上のところを切つた」⁽¹⁰⁰⁾に変更した。

事実についてのロスの厳密さは言葉の選び方についても言えた。例えば、谷本氏が原爆投下の朝に疎開させた友人の荷物であった「筆筒」について、初稿では「日本式の *closet*」⁽¹⁰¹⁾としていたが、ロスは「*closet* は作り付けのものだ」⁽¹⁰²⁾と指摘、ハーシーは「*cabinet*」⁽¹⁰²⁾に変えた。藤井医師の家族について、初稿では「家族に心配はいらない」となつていたが、ロスは「（著者註…その後行方不明になる）姪が同居していたことが後から出てくるが、姪も家族の一員だ」⁽¹⁰³⁾と主張し、ハーシーは「婦人や子供たちに心配はいらない」⁽¹⁰⁴⁾に変更した。

ロスの役割は事実関係の確認に留まらなかつた。上述の距離の概念に加え、ロスは日時を特定することを求めている。ハーシー

もすでに時系列で主人公たちの動きを追うアプローチはとつていたが、「三日目」や「九日」など、日付や月を明示していないことが多かった。ロスには「物事が起こっている時間を文章の中に折り込む」⁽¹⁰⁵⁾ことを求めた。ハーシーが月日や時間を加筆、補足したのは全体で十七カ所に上る。これによって、いつ、どこで、だれが何をやっていったかということがよりイメージしやすくなり、主人公たちの動きがより明確になった。

各主人公の語りの冒頭に、独立した導入部分を入れることを提案したのもロスだった。一章についての八月六日付けの質問表でロスは、佐々木医師の被爆前の行動を描く部分について次のように述べている。「始まりの一文をここで繰り返した方がよい。『*the morning the bomb was dropped*…(原爆投下の日の朝…)』の異形のもの。つまり、各部分を単独の物語として正式な導入部分を与えたいということ。例えば、『広島へ通勤する道すがら』⁽¹⁰⁷⁾というはどうだろう。」⁽¹⁰⁶⁾

ハーシーは初稿で「田舎からの汽車の中で、佐々木輝文医師は前夜見た不愉快な悪夢のことを考えていた」としていたが、最終的には提案通り、最初の節に「広島へ」を加えている⁽¹⁰⁸⁾。藤井博士やクラインゾルゲ神父、佐々木とし子さんについての書き出し部分にも、以下のようにロスの提案を反映させる形でその後の悲劇を予兆する言葉を書き加えた。(加筆部分の強調筆者)

原爆投下までの毎日、藤井正和博士は…⁽¹⁰⁹⁾

原爆が炸裂する朝、イエズス会のウィルヘルム・クラインゾルゲ神父は…⁽¹¹⁰⁾

原爆投下の朝、東洋製缶工場事務員の佐々木とし子さん(佐

々木医師と姻戚関係はない)は…⁽¹¹¹⁾

二章では、原爆炸裂についての一句を各主人公の語りの書き出しの文章に含めるスタイルでほぼ統一された。時間や日時を明記する上述の試みとも相まって、これ以降は原爆炸裂の瞬間が、物語全体における標準の時間軸となっていく。(加筆部分の強調筆者)

原爆炸裂直後、谷本清牧師は…⁽¹¹²⁾

炸裂のあと、家の残骸の下からもがき出た仕立て屋の後家さん、中村初代さんは…⁽¹¹³⁾

炸裂の直後、イエズス会のウィルヘルム・クラインゾルゲ神父が…⁽¹¹⁴⁾

炸裂直後の藤井、神田、町井三医師の運命—この三人は…⁽¹¹⁵⁾

ハーシーも各章は、原爆投下からの時間で書き出してはいたが、ロスはその効果に着目し、スタイル化して各主人公の語りにまで広げた。それは、六人のそれぞれの一見、バラバラな暮らしや行動についての語りに統一感を持たせたほか、原爆投下の瞬間をゼロとして新たに回り始めた核時代の時間軸で人々が生活していることを認識させるものであったと言える。

ところで、『ニュー Yorker』の編集者たちは、原爆の特異性である放射線についての記述には、何らかの役割を果たしたであろうか。ロスは原爆が人体にどのような影響を与えたのかということにも強い関心を持っていた。それは質問表に含まれる次の

ような言葉からも明らかである。

この爆弾がどのように人々を殺したのか、大きな関心がある。⁽¹¹⁶⁾
／これらの人々を殺したのは何なのか、火傷なのか、破片が落ちてきたためか、震盪か。この一年、このことを考えてきて、この作品が教えてくれることを期待していたが教えてくれない。一〇万人もの死者が周りにいながら、ハーシーは彼らがどのように亡くなったかを教えてくれない。(中略) 外傷のない女性が亡くなっていった。あの日の死体の多くが火傷も外傷もなかったのだろうか。外傷のない死者は、全体のどれくらいを占めたのか。⁽¹¹⁷⁾

念のため付け加えておくと、ロスがこうした問題点を記したのは、続く三章、四章を読む前だった。ハーシーは、放射線傷害である原爆症の症状についての記述を主に三章で、放射線の作用や日本人科学者による被爆地調査の結果に関する説明を四章で行っており、どれほど熱心にロスがそれらを読んだかは想像に難くない。残念ながら、この部分についてのロスの質問表はないが、ハーシーの初稿を見る限り、ロスの関心はやはり上述の言葉に集約されていたと言えるだろう。

実は、ハーシーの初稿には、最終的にはそっくり削除される結末部分のほか、小規模ながら丸ごと加筆されたり、その大部分が書き直されたりするなどの変更が行われた部分が何力所かある。一つは一章の広島市の地形や地勢、人口の概要を述べた部分⁽¹¹⁸⁾、二つ目はクライソルゲ神父が宣教師館に戻って紙張子のスーツケ

ースを発見する場面⁽¹¹⁹⁾、三つ目は同じく二章で、草履履きの神学生とシースリック神父がお互いの貴重品について意見を述べ合う場面⁽¹²⁰⁾、四つ目が四章の中の広島が投下対象に選定された理由や原爆による死因の内訳、日本の建築法規についての説明の部分⁽¹²¹⁾、五つ目が同じく四章で、日本の科学者が被爆地での調査によって蓄えた原爆についての知識の話である。このうち、二つ目と四つ目の大部分は出版されたばかりだった米戦略爆撃調査団 (USSRB) の報告書⁽¹²²⁾を参考にしたと思われるが、中でも四つ目のうちの死因の内訳は次のようなものであった。

いろんな原因が重なり合って死んだ人も多いので、どの原因で、どれだけ死んだという正確な算出は不可能だったが、統計係 (筆者註：この場合は USSRB の調査員の意) の算定によれば、死因の約二五パーセントが爆弾による直接の火傷、約五〇パーセントが他の負傷、約二〇パーセントが放射線の作用によるものである。⁽¹²³⁾

これはまさにロスが知っていたことであった。こうした加筆や修正がどれほど編集者の指摘や提案によって行われたかは不明だが、ロスの問題意識が、事実への執着と相まって、ハーシーの作品をさらに磨き上げる強力な武器となったであろうことは間違いないだろう。それは、より周到な事実確認と慎重さが求められたであろう、第三、第四の章においては、なおさらであった。

『ニュー Yorker』誌が事実を厳密であることを証明する話は、

ロスの質問表に指摘されたもの以外にもある。ハーシーは、原爆の正体を尋ねた藤井博士に対して、友人の町井医師が「モロトフの花籠」に違いないと答えた場面の説明を、初稿では「モロトフの花籠」とは、「カクテル」、ソ連人外交官にちなんで名付けられた爆弾に、日本人が付けた独特の名称」としていた。編集の手を経て文面は「モロトフの花籠」とは、「カクテル」、すなわち自動的に散乱する爆弾の束に、日本人が奉った洒落た仇名」となったが、印刷にかかる直前、印刷所の校正員が「モロトフのカクテル」は対戦車兵器として用いられる火炎瓶のことで、焼夷弾を指すのは「モロトフのパン籠」の間違いであること指摘した。「ユーヨーカー」誌サイドでも確認し、土壇場で「カクテル」は「パン籠」に直されたのである。⁽¹²⁴⁾

最後に結末部分はどうのように変わったのかを見ていきたい。最終的に出版された「ヒロシマ」の最後は、中村とし子さんの当時一〇歳だった長男、敏男の作文で締めくくられている。初稿では以下の文章がそれに続いていた。

広島市民の多数は、アメリカ人に、何ものも消し難いほどの恨みを抱きつづけていた。「ちようど、いま、いつか佐々木医師がいった、「東京で戦犯の裁判をやっていますよ。原子爆弾の使用を決定した連中を、あの裁判にかけて、みんな絞首刑にすべきじゃないですか。⁽¹²⁵⁾もし彼らがそれを兵士に對して使用していれば―それも十分ひどいことです―まだしも、しかし私は病院で見てきたのです。女性たちが…」佐

々木医師は気を遣ってそこで言葉を止めた。

谷本氏は最近、彼の残骸となった教会を米人将校と検査した後、一緒に歩いて次のように語った。「私には輸送というものが前途有望のように思えます。」米人将校は「そうですね。航空機はこれからいろいろなところに行くようになるでしょう。ジェットエンジンなどの普及ですね」と応えた。それに対して谷本氏は首を振った。「いいえ、私が言わんとしたのはそういうことではありません。原子力によるものということです。原子力は様々な利用できる可能性があると聞きます。例えば、飛行機や船、自動車を動かすために。私と友人たちはこのことをいつも話しているんです」。そして谷本氏は厳かな調子で言った。「私たち広島の間が、原子力が非常に強力であると信じるのには根拠があるのですよ。」

このうち佐々木医師の絞首刑に関する発言までは、別の箇所に移動されて残ったものの、残りは最終的に削除されている。発電など原子力の可能性にいち早く期待を持ったのが被爆地の市民であったことは、日本の原子力発電導入の経緯をめぐる研究でも明らかにされているが⁽¹²⁶⁾、谷本氏の発言もそれを良く示す例であると言えよう。とはいえ、原子力への憧憬、特に「原子力使用の最初の実験材料⁽¹²⁷⁾」にされた者からの皮肉とも思える言葉で幕を閉じることは、投下国である米国においては、原爆の軍事使用の議論から話題を逸らす方向に働いた可能性もあろう。

どのような判断でこの結末が変えられることになったのかは不

明だが、その実用性がまだ未知のものに普遍的な価値を期待することは出来ないと考えたとでもおかしくない。いずれにしても、女性や子どもを巻き添えにする戦争の現実を表現した敏男の作文で終わらせる決断は、よりよい選択だったと言えるだろう。六人の主人公には含まれていなかった、広島市民のもう一つの構成要素である子どもの視点で原爆を語らせたことは、読者に広島での経験を追体験することを可能にするというハーシーの意図とも合致している。それはまた、無邪気な語りであるが故に読む者の胸に一層強く迫ってくる。

5 おわりに

ハーシーは一九八九年に出版した短編伝記集『Life Sketches』をシヨーンに捧げ、序文代わりの冒頭の「注記」をロスとのエピソードで埋めた。そこでハーシーは、ある単語が間違ひなく、そのまま印刷されることを確実にするために、印刷機に上つて最後まで活字を確かめたという、ロスにまつわる語り種に触れている。それは、ハーシーが人生を通して大切にしてきた教訓だという。命がけで印刷機に上つた編集者以上にライターも言葉に対して情熱を持つべきとの、そしてすべての言葉において完璧な作品を生み出すことは不可能であるとの教訓だ⁽¹²⁸⁾という。

これまで見てきたとおり、「ヒロシマ」はハーシーの作品ではあるが、ロスとシヨーンの二人はそれを今ある形にするために、編集者として計り知れない役割を果たしたと言える。そもそも、ハーシーとロス、シヨーンのだけ一人が欠けても、「ヒロシマ」

は生まれなかつたとさえ筆者には思える。

初稿と『ニュー Yorker』誌の掲載記事では確かに、結末部分を除いて構成や内容の大枠が変わったわけではない。ロスらの指摘の多くは、繊細な言葉の意味の違いに目を向けさせる、あるいは事実の確認や事実をより明確にするよう求めるものであり、今なお高い評価を受ける、ハーシーの抑制の効いた語り口や物語の構成は当初から手つかずで残されていると言つてよい。しかし、それらを受けてなされたささやかな修正の積み重ねは確実に、全体のレベルを向上させた。また、時間と距離の概念を丁寧に文章に織り込んで行く手法は、より分かりやすく被爆地の状況や推移を語ることを可能にした。

二人の編集者の手は、未知であるがゆえに、より詳しく、正確な情報が必要とされた原爆についてのルポルタージュにとつては、不可欠な「仕上げ」の作業だった。それは、ほぼ七十年を経てなお、「ヒロシマ」を時の試練に堪えて読み継がれることを可能にしてきた、一つの大きな要素であつたと言える。

注

- 1 Hersey, John, "Hiroshima," *New Yorker*, Aug. 31, 1946: 15-68.
- 2 ペンギンやランダムハウス、バンタム、スカラスティック、ヴェンテージ、モダンライブラリーなどからで、WorldCat で検索すると版は百を越える。
- 3 WorldCat に登録されているだけでも、ドイツ語、イタリア語、フランス語、スペイン語、アラビア語、ヘブライ後、中国語、日本語、オランダ語、デンマーク語、ポルトガル語、スウェーデン語、ノル

- ウエー語、ポーランド語、フィンランド語、ヘルシヤ語がある。
- 4 例えに、NY: A. A. Knopf, 1946; NY: Modern Library, 1946; NY: Bantam Books, 1948, 1959.
- 5 *Men on Bataan* (1943) と *Blues* (1987) には謝辞があるが、対象の多くは取材協力者である。編集者としては、*Blues* の謝辞と *The Call* (1985) の Notes、冒頭で、Knopf 社の編集者であるジュリアス・シヨーンズ (Judith Jones) の名前が挙げられている。ハーシーはシヨーンズについて「編集者のあらゆる機能を満たすことのできる残り少ない編集者の一人」と述べている。Dee, Jonathan, Interviews “John Hersey, *The Art of Fiction* No. 92,” *The Paris Review*, Vol. 100 (Summer-Fall, 1986), open for access online at <http://www.theparisreview.org/interviews/2756/the-art-of-fiction-no-92-john-hersey>.
- 6 Bonetti, Kay, *Interview with John Hersey*, Columbia, MO: American Audio Prose Library (audio tape recording), 1989.
- 7 *Life Sketches* の Note でロスの編集者としての入らなりを描く中で、「ロンドン」の編集作業について触れている。
- 8 Washburn, Patrick S., “The Office of Censorship’s Attempt to Control Press Coverage of the Atomic Bomb during World War II,” July 1988, ERIC document ED295201; マイケル・S・スウィーニー著、土屋礼子、松永寛明訳『米国のメディアと戦時検閲—第二次世界大戦における勝利の秘密』(法政大学出版局、2004年)、263-279、繁沢敦子『原爆と検閲—アメリカ人記者たちが見た広島・長崎』(中公新書、2010年)、121-134。
- 9 こうした研究としては、高橋博子『新訂増補版 封印されたヒロシマ・ナガサキ—米核実験と民間防衛計画』(凱風社、2012年) などがある。
- 10 繁沢敦子、「シヨン・ハーシーの『ロンドン』再考——96年目の視点で読み解く』『広島国際研究』第18号(広島市立大学国際学部、2012年)、19-38。
- 11 Hiroshima, first draft, autograph manuscript, Box 2, YCAL MSS 707, John Hersey Papers, Yale Collection of American Literature, Beinecke Rare Book and Manuscript Library. (以下、JHP YCAL BRBML) への史料について貴重な情報を下さった法政大学の川口悠子講師に感謝する。
- 12 Chase, Edward T., “Ross of the New Yorker Edits Hiroshima by John Hersey,” *The Yale Review* 88 (3) 2000: 16-24.
- 13 Yagoda, Ben, *About Town: The New Yorker and the World It Made*, NY: Scribner, 2000.
- 14 Thurber, James, *The Years with Ross*, Boston: Little, Brown and Company, 1957.
- 15 Mehta, Ved, *Remembering Mr. Shaw’s New Yorker: The Invisible Art of Editing*, New York: Sinclair-Stevenson, 1998.
- 16 “Guide to the John Hersey Papers,” Yale Collection of American Literature, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University Library, 3-4.
- 17 “Hiroshima Given To Yale By Hersey,” *Yale Daily News*, Vol. LXXVIII, No. 158 (May 3, 1947), Yale University Library Digital Collection, 1.
- 18 “Finding Aid,” The New Yorker Records, Manuscripts and Archives

- Division, Humanities and Social Sciences Library, the New York Public Library, 1.
- 19 Selected Papers of Edward T. Chase, 1904-2002 (mostly 1979-2002), Princeton University Library.
- 20 筆者の質問に対するプリンストン大学図書館からの二〇一二年四月二六日付回答*。
- 21 Sanders, David, *John Hersey Revisited*. Boston: Twayne Publishers, 1991, xiii, 1-3.
- 22 Kunkel, Thomas, *Genius in Disguise: Harold Ross of the New Yorker*, NY: Carroll & Graf Publishers, 1995, 369-370; Griffith, Thomas, *Harry and Teddy: The Turbulent Friendship of Press Lord Henry R. Luce and His Favorite Reporter, Theodore H. White*, NY: Random House, 1995, 139-141; Vanderlan, Robert, *Intellectuals Incorporated: Politics, Art, and Ideas Inside Henry Luce's Media Empire*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2010, 216-217.
- 23 Hersey, John, *Men on Batan*, New York: Alfred A. Knopf, 1942.
- 24 Hersey, John, *Into the Valley: A Skirmish of the Marines*, New York: Alfred A. Knopf, 1943. [シモン・ホーナー「チャンネルの谷間へー画タレかなる戦従軍記」西村健二編訳『最前線の戦闘 米軍兵士の太平洋戦争』(中央公論社 1994年), 19-118.]
- 25 Hersey, John, *A Bell for Adano*, New York: Alfred A. Knopf, 1944.
- 26 Hersey, John, "A Bell for Adano," *Life*, Dec. 18, 1944, 76-89.
- 27 Kunkel, , *Genius in Disguise*, 13-44, 48-49.
- 28 *Ibid.*, 49-50; Cornobise, Alfred E., *The Stars and Stripes: Doughboy Journalism in World War I*, Westport, CT: Greenwood Press, 1984, 6, 12-22. ウールコットとマダムスはその後『「ニューヨーカー」誌の重要な寄稿者となる。
- 29 Wood, James Playsted, *Magazines in the United States: Their Social and Economic Influence*, New York: Ronald Press, 1949, 210-212; Kunkel, *Genius in Disguise*, 60-94. 創刊にあたっては『「ニューヨーカータイムズ」紙のライターだった妻ジェーンの貢献が大きかった。
- 30 同じ七割はマンハッタン島以外の購読者が占めていた。
Kunkel/Genius in Disguise, 168, 222.
- 31 *Ibid.*, 140-141, 250-258, 263-268, 274; Milkman, Paul, *PM: A New Deal in Journalism, 1940-1948*, New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1997, 12-14.
- 32 Thurber, 80.
- 33 Kunkel, *Genius in Disguise*, 272-274.
- 34 *Ibid.*, pp. 340-344; "Post Script," *New Yorker*, 40; Mahon, Gigi, *The Last Days of the New Yorker*, New York: New American Library, 1988, 68.
- 35 "Comment: William Shawn," *New Yorker*, 4.
- 36 Pace Eric, "William Shawn, 85, Is Dead," *New Yorker's Gentle Despot*," *New York Times*, Dec. 9, 1992, A1.
- 37 Carson, Rachel, "A Reporter at Large: Silent Spring," *The New Yorker*. 一九六二年六月一六日' 三三日' 三〇日' 三三頁' わたつと掲載された。
- 38 Capote, Truman, "Annals of Crime: In Cold Blood," *The New Yorker*. 一九六五年九月一五日' 一〇月二日' 九日' 一六日の四号' わたつと連載された。

- 39 Arendt, Hanna, "A Reporter at Large: Eichmann in Jerusalem," *The New Yorker*. 一九六三年二月一六日、二三三日、三月二日、九日、一六日の五号にわたって掲載された。
- 40 Hersey, John, "A Reporter at Large: Survival," *The New Yorker*, June 17, 1944, reprinted in John Hersey, *Here to Stay*, New York: Tesoro Books, 1988, 87-103. 衝突事故は一九四三年八月に起った。ノースーは妻を介してケネディと交友関係があり、ケネディが帰国した際に事故の話をも本人から聞いて取材を始めた。
- 41 Kunkel, Thomas, *Letters from the Editor: The New Yorker's Harold Ross*, NY: the Modern Library, 2000, 234.
- 42 Kunkel, *Genius in Disguise*, pp. 202-204, 288-289.
- 43 Hersey, *Life Sketches*, p. 38; Griffith, pp. 139-140; Vanderbilt, 216, 221, 241-247, 251-252.
- 44 White, Theodore H., *In Search of History: A Personal Adventure*, New York: Warner Books, 1979, 247.
- 45 『原爆記録映画誌』相原秀三資料、広島平和記念資料館所蔵、纂訳「ヒロシマ・ノンナーの『コラム』再考」, 21; Yagoda, 186-187.
- 46 Letter from Hersey to Bill, dated June 28, 1946, Box 50, Hersey, John, "Hiroshima," New Yorker Records. Manuscripts and Archives Division. The New York Public Library. Astor, Lenox, and Tilden Foundations. (NYPL NYR NYPL)
- 47 Yavendini, Michael J., "John Hersey and the American Conscience: The Reception of "Hiroshima," *Pacific Historical Review*, 43: 1 (1974), p. 34; Dee, Interviews "John Hersey,"
- 48 Yagoda, 187.
- 49 Hersey, John, *Life Sketches*, New York: Alfred A. Knopf, 1989, p. x.
- 50 Yagoda, 187-188.
- 51 Thurber, 80, 169-170
- 52 Mehta, 132-142; Dee, Interviews "John Hersey."
- 53 Dee, Interviews "John Hersey." ヤバタは毎日十時十時から午前十一時までの十日間だったと述べている。 Yagoda, 187.
- 54 Hersey, *Life Sketches*, x.
- 55 Chase, 16.
- 56 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part I" by Hersey, dated August 6, 1946, folder 2 (1946), Box 39 (EDITORIAL - ROSS, Harold - Notes on Writings), NYR NYPL. この原稿は「補記質問を別紙でなされた。Add to Mr. Ross's notes on Part I, Hersey articles on Hiroshima, dated August 6, 1946, folder 2 (1946), Box 39 (EDITORIAL - ROSS, Harold - Notes on Writings), NYR NYPL.
- 57 Mr. Ross's notes on revise of Part I, Hersey-Hiroshima series, August 16, 1946, folder 2 (1946), Box 39 (EDITORIAL - ROSS, Harold - Notes on Writings), NYR NYPL.
- 58 Mr. Ross's notes (ADDITIONAL) on revise of Part I, Hersey-Hiroshima series, dated August 19, 1946, folder 2 (1946), Box 39 (EDITORIAL - ROSS, Harold - Notes on Writings), NYR NYPL.
- 59 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II" by Hersey, dated August 8, 1946, folder 2 (1946), Box 39 (EDITORIAL - ROSS, Harold - Notes on Writings), NYR NYPL.
- 60 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part II Revise" by Hersey, dated August 19, 1946, folder 2 (1946), Box 39

- (EDITORIAL - ROSS, Harold - Notes on Writings), NYR NYPL.
- 61 Letter from H. W. Ross to Mr. Mason, dated May 19, 1947, Box 50, Hersey, John/Harold Ross, 1946-1950, NYR NYPL.
- 62 題名に「ひろし」は、最後までなかなか決まらなかったようだ。最初のごまでは「Some Events at Hiroshima (広島での出来事)」となっており、八月一日付けの質問表にもそれが使われていた。「ハーシーの初稿にはほかにも、「Some Experiences at Hiroshima (広島での経験)」や「Some Adventures at Hiroshima (広島での冒険)」、「Hiroshima: The Original Child Bomb (広島：原子爆弾)」とごま案を書いた跡がある。
- 63 Hersey, Hiroshima, 15; シモン・ハーシー、石川欣一、谷本清「明田川融訳『コロムブ 増補版』(法政大学出版局、2003年)」、1.
- 64 Add to Mr. Ross's notes on Part I, Hersey articles on Hiroshima, dated August 6, 1946.
- 65 Hersey, Hiroshima, 16; ハーシー、6.
- 66 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part II Revise" by Hersey, dated August 19, 1946.
- 67 Hersey, Hiroshima, 25; ハーシー、48.
- 68 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part II Revise" by Hersey, dated August 19, 1946.
- 69 Hersey, "Hiroshima," 23; ハーシー、36-37 (この部分の訳文「画手で物を上げたみょうな」はこの場合、ロスの質問に適切に答えたものになつてゐる)。
- 70 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part I" by Hersey, dated August 6, 1946.
- 71 Hersey, "Hiroshima," 15; ハーシー、3.
- 72 Hersey, "Hiroshima," 23; ハーシー、38.
- 73 Hersey, "Hiroshima," 25; ハーシー、56.
- 74 Mr. Ross's notes on revise of Part I, Hersey-Hiroshima series, August 16, 1946.
- 75 Hersey, "Hiroshima," 15; ハーシー、3.
- 76 Mr. Ross's notes (ADDITIONAL) on revise of Part I, Hersey-Hiroshima series, dated August 19, 1946.
- 77 Hersey, "Hiroshima," 16; ハーシー、6. 丸括弧で括られて挿入われている(以下五人のものも同様)。
- 78 Hersey, "Hiroshima," 17; ハーシー、10.
- 79 Hersey, "Hiroshima," 18; ハーシー、13.
- 80 Hersey, "Hiroshima," 18; ハーシー、16.
- 81 Hersey, "Hiroshima," 19; ハーシー、18.
- 82 Hersey, "Hiroshima," 19; ハーシー、20.
- 83 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II" by Hersey, dated August 8, 1946.
- 84 Hersey, "Hiroshima," 20; ハーシー、25.
- 85 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part I" by Hersey, dated August 6, 1946.
- 86 Hersey, "Hiroshima," 19; ハーシー、19.
- 87 Hersey, "Hiroshima," 25; ハーシー、47.
- 88 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II" by Hersey, dated August 8, 1946.
- 89 Hersey, "Hiroshima," 23; ハーシー、38.
- 90 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part II

- Revise” by Hersey, dated August 19, 1946.
- 61 Hersey, “Hiroshima,” 24; ハーシー’ 42-43.
- 62 Mr. Ross’s notes (ADDITIONAL) on revises of Part I, Hersey-Hiroshima series, dated August 19, 1946.
- 63 Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima Part I” by Hersey, dated August 6, 1946; Mr. Ross’s notes on revise of Part I, Hersey-Hiroshima series, August 16, 1946; Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II” by Hersey, dated August 8, 1946.
- 94 ハーシーが『ミタノの鐘』を『タイム』誌から与えられた一ヶ月の休暇の間に書き上げたこと。Dec, Interviews “John Hersey.”
- 95 Mr. Ross’s notes (ADDITIONAL) on revises of Part I, Hersey-Hiroshima series, dated August 19, 1946; Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima Part II Revise” by Hersey, dated August 19, 1946.
- 96 Hersey, “Hiroshima,” 18, 21; ハーシー’ 12, 30.
- 97 Mr. Ross’s notes (ADDITIONAL) on revises of Part I, Hersey-Hiroshima series, dated August 19, 1946; Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II” by Hersey, dated August 8, 1946.
- 98 Hersey, “Hiroshima,” 22; ハーシー’ 32.
- 99 Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II” by Hersey, dated August 8, 1946.
- 100 Hersey, “Hiroshima,” 20; ハーシー’ 26.
- 101 Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima Part I” by Hersey, dated August 6, 1946.
- 102 Hersey, “Hiroshima,” 16; ハーシー’ 5. 日本語訳では「筆筒」の#46。
- 103 Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima Part I” by Hersey, dated August 6, 1946.
- 104 Hersey, “Hiroshima,” 18; ハーシー’ 12.
- 105 Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima-Part II” by Hersey, dated August 8, 1946.
- 106 ロスは、中村と子やとの導入部分にある「… the night before the bomb was dropped… (原爆投下の前後)」を指したつもりではなかったが。初稿ではこれが唯一、予兆を含む書き出しであった。
- 107 Mr. Ross’s notes on “Reporter-Some Events at Hiroshima Part I” by Hersey, dated August 6, 1946.
- 108 Hersey, “Hiroshima,” 18; ハーシー’ 16.
- 109 Hersey, “Hiroshima,” 17; ハーシー’ 11.
- 110 Hersey, “Hiroshima,” 18; ハーシー’ 14.
- 111 Hersey, “Hiroshima,” 19; ハーシー’ 19.
- 112 Hersey, “Hiroshima,” 19; ハーシー’ 21. 「原爆炸裂直後」は初稿で省略されたが、冒頭に配置された。
- 113 Hersey, “Hiroshima,” 20; ハーシー’ 22. 「炸裂のあと」が書き加えられた。
- 114 Hersey, “Hiroshima,” 20; ハーシー’ 26. 初稿では「After a few moments of madness (数秒間の狂気の後)」となつた。
- 115 Hersey, “Hiroshima,” 21; ハーシー’ 30. 藤井医師単独の語りには省略された。

- 116 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some Events at Hiroshima Part I" by Hersey, dated August 6, 1946.
- 117 Mr. Ross's notes on "Reporter-Some events at Hiroshima-Part II" by Hersey, dated August 8, 1946.
- 118 Hersey, "Hiroshima," 16; ハーシー, '5.
- 119 Hersey, "Hiroshima," 21; ハーシー, '27-28.
- 120 Hersey, "Hiroshima," 24-25; ハーシー, '46.
- 121 Hersey, "Hiroshima," 61-62; ハーシー, '102-103°.
- 122 United States Strategic Bombing Survey Chairman's Office, *The Effects of Atomic Bombs on Hiroshima and Nagasaki*, Washington D.C.: US Government Printing Office, 1946. 9月30日に発表された。一般人が入手できたものとしては週刊誌 US News が7月5日号に全文を掲載している。"Atomic Bomb-First Official Report on Damage to Japan: Full Text of U.S. Strategic Bombing Survey's Findings," Box 21, Uncat. Za MS235, JHP, YCAL BRBML.
- 123 Hersey, "Hiroshima," 62; ハーシー, '103°.
- 124 Letter to Hersey from William Shawn, dated August 27, 1946, Box 434,
- "Hersey, John, 1946 Editorial Correspondence," NYR NYPL. この記述部分は Hersey, Hiroshima, 21; ハーシー, '29.
- 125 この部分は結局、中村敏男の作文の三段落前に挿入された。Hersey, "Hiroshima," 67-68; ハーシー, '114.
- 126 例えば、田中利幸、ピーター・カズニック、『原発とヒロシマ「原子力平和利用」の真相』(岩波ブックレット819, 2011年), '24-26, 43-44.
- 127 Hersey, "Hiroshima," 32; ハーシー, '64-65.
- 128 Hersey, *Life Sketches*, x-xi.

付記

本稿は、第四二回原爆文学研究会(二〇一三年八月三十一日、神戸市外国語大学)における筆者の報告に大幅に加筆・修正したものである。多くの質問やコメントを通じて報告者に新しい視点や気づきを下さった方々に感謝する。また、史料からの引用と「ヒロシマ」初稿ならびにロスの質問表の一部画像の掲載を許可して下さったイェール大学バイネキー図書館、ニューヨーク公共図書館、『ニュー Yorker』誌の関係者ならびにブルック・ハーシー(Brook Hersey)氏に深く御礼申し上げます。